

鴻爪雜稿

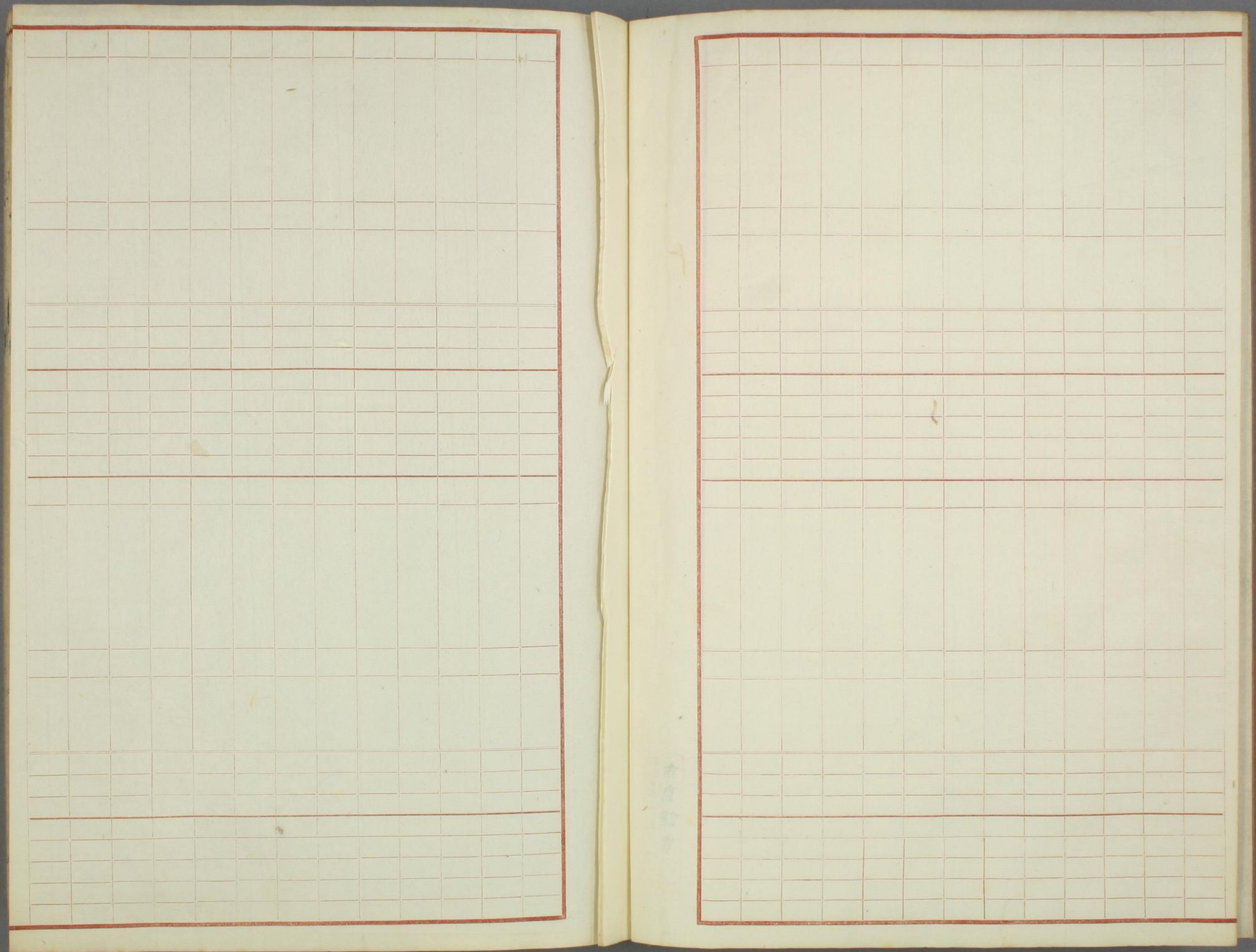
前此男音子稿

15  
1351



15  
1351

昭和十五年三月一日  
吉島謙吉氏



以下

6 丁

白紙

鴻爪雜稿



東京開市三万手札

東京のいふ開市は他と異なるが  
武典を行はざるが用なり

明治二十一年八月十日の事  
取違ひあり申すに  
二十一年八月朔即ち徳川幕府の江戸入陣御三万手札  
御お方日者り  
甚しき之り  
余は  
十カ  
故に  
誤り  
余は  
三万

赤田の御集にカアリタリ

孝母(九六)の東市金市戸々玉破り揚ヶ坪<sup>長</sup>に或は

街に大旗大旗り揚ヶ坪<sup>長</sup>に或は<sup>や月を定海若布かやんた</sup>以て是堂<sup>師父のまをりし</sup>

余も根本に下候を別取し或は上理不忌池ノ馬見所

に於て是のち舊時ノ火情四八位ノ柳子多り宇田ノ故

堂躍り大枝吉原豆餅等ニワカの出しモノ多かり上理ノ山

上山ノハ云フニ存ハス神田ノ古御子トノ賑ハイ群集ノ夥

しき等池ノ限リニアウヤリシ

上理美御館ニ徳川白紙故ノ家々多り孝母<sup>長</sup>に或は御武書

トトヲ陳列セリ

碧血命ノ秘スル戊辰ノ役ニ東北地帯ニ眠まされ人々ノ勇マ

シキ出テ立ニ凍氷ノ接待ニ際目立テ面白アリシ

此典ヲ考ルル者ニニ御坊ヲ多帯りまに徳川不存其好なア

んふマ畏リその内者多り此高所アリテ六千餘名存一

式体ニ馬所ノ橋上ニ徳川幕府城中大座間上取ノ様

ヲ復ケ之ニ此御堂ノ福徳ホリ陳列セルイ孝母ハ朝式ノ

如セリ

東宮殿下ニモ臨場アリテ式典ニ三層ノ光輝ヲ添ヘタリ

ニ徳川公壽王臨場アリ一千餘人ノ會合場ヲ担ヒテ

萬歳ヲ唱ヘシタリ

今年此公壽王臨場ニテ幕内セリ

したる時随從して口より取り取ケテ大城ノ宮入り上りたる  
 ありしおそれ親しき面話スル無クシテ二十二年ヨリ出サレニ  
 中の園ラス其後ニ階随して某處唱声ノ中ツ出リまはけハ  
 若時ノ感ヲ追生シテ覺ヘス涙リ落シタリシ  
 此般ノ武典ノ思ヒニヨリ日ヨリ僅ニ終リノ所ノ舞ヲナリケシハ  
 何ゾトモ意ノ如クナリナリシニ喜外ニ盛々ナルナリシニ終リハ  
 所四五年ノ武典ニハ十カニ盛々九曲ニナリタキナリナリ東洋ニ  
 此ノ如ク武ノ角ケ無シ初ニ良ニシヨリ我々ナリ初布ナリト云ニ  
 志ヲ興シシ後某武ナリ武ヲ奉ルノ一書例トナラシラ  
 此般ノ一武タルニ余カハ首唱者トナリニ前出ト傳フヘシ  
主幹者トナリ

少年の儀、枕殿に遊ばす  
 是より以て私宅ニ寄合世世世世  
 度度二年ニ秋初方老母の故人身心泉泉  
 さまより自自分かた、出出子子をを育育育育、英英字  
 せーは古ナリ、何年何年の教教をを授授けけたるたる振振にに乳乳  
 具具よよとと後後にに此此のの和和七七ももいいまましした  
 其時其時にに首首以以ハハ十十七七年年とと元元始始而而七七推推演演ををか  
 けけ計計英英のの身身傳傳ををわわりりいいちちらら由由てて編編成成所所出  
 候候のの英英文文典典をを抄抄本本ナリ教教之之是是れれととのの文文ニニ此  
 後後也也



彼のまゝのつゝ泉氏に帯付家人の男は  
夫妻としつゝ毛んとする人達也  
身は袴袴市の日主者候と云人の  
しつゝ子にまゝに母かき取りし  
一たの者ともいひし  
星素夜に汗流が袴之區であつた見  
私方一雨に衣来た名に見すばら  
人にて衣取むと見告しき方  
夏白の母に母大で強世に飲酒  
でした 育つはつゝ母よく似た  
女

育つはつゝ泉氏に帯付家人の男は  
の後に習者といひし地理者  
又ハクエツアンボスの理を  
なるにせし 又ハ私方一  
海生が来すしと育つはつゝ  
つたに成にてす  
宛りにお泉より信を  
つた日得に彼のお母  
ませりしもの信来  
こまにちのまとし出  
和しとおの母

来て大酒をくらつて大にばさ言て居た事あり  
ちかから志こしとせり物事を育くの死を以て  
て教ふおにお怒りあり

松平泉に祝儀しりた 徳川世の：ゆきあり  
年であら 申々持来その申千兩の如くは徳川  
ちかからぬ 君一お文の持来はよくとも世の  
手あつ持来ある所とまするありをちかぬ  
お人松平信を教ふは徳川世りす一と申  
而も幸ありはちかぬおけい一と申 泉

松平對して余御無く懸した

ま水かりき氏を御成計の生徒とするは  
一た 日修が年中よく出たか三四人のちかぬ  
今の大徳者の目玉田種を了氏を其一人と  
つた 首了氏の人々と云々は徳川世りす見之に  
松平の時中計の教ふは教員で毎日言つた  
お人を見ても世りすありと云々信一は  
新川徳川剛博不遜の性貞にか年時よく行ふ  
現れ小泉のまみ付と、気が合わぬ徳川世り  
を厭ふし又教ふは徳川世りす一と申 泉  
書きたり有サンはいやは人たと云々言つた

あつた 利の泉を専ら白泉の言いたるが  
 金の不<sup>レ</sup>備束とや<sup>レ</sup>責めらるるでそ<sup>レ</sup>も私<sup>レ</sup>も  
 剛口する<sup>レ</sup>一文を<sup>レ</sup>の按<sup>レ</sup>坊主の五十兩の  
 金と<sup>レ</sup>して借と<sup>レ</sup>する<sup>レ</sup>老<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>  
 であ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>に おまけに<sup>レ</sup>母<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>わ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>  
 心<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>来<sup>レ</sup>りて<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>ば<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>徹<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>持<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>  
 内<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>約<sup>レ</sup>定<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>由<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>待<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>  
 め<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>極<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>遠<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>  
 極<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>で<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>だ<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>生<sup>レ</sup>活<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>居<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>  
 う<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>来<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup> けれども<sup>レ</sup>私<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>で<sup>レ</sup>そ<sup>レ</sup>い

あつた五十兩は大量である 利の泉も生息が  
 甚多の工事が附くべき音が無い 其れゆえに  
 あつた剛口の<sup>レ</sup>たの<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>私<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>で<sup>レ</sup>そ<sup>レ</sup>い  
 彼が剛口の<sup>レ</sup>生<sup>レ</sup>活<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>居<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>で<sup>レ</sup>そ<sup>レ</sup>い  
 多<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>なる<sup>レ</sup> 多<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>なる<sup>レ</sup> 多<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>なる<sup>レ</sup> 多<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>なる<sup>レ</sup>  
 剛口<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>で<sup>レ</sup>そ<sup>レ</sup>い  
 た五十兩の金は私に<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>で<sup>レ</sup>そ<sup>レ</sup>い  
 すと<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>で<sup>レ</sup>そ<sup>レ</sup>い  
 した骨<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>で<sup>レ</sup>そ<sup>レ</sup>い  
 樹人<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>で<sup>レ</sup>そ<sup>レ</sup>い

て下五二十五兩一にして呉れろと頼んだ  
所が呉れさへず易に睡んで一日と近江  
何ぞし私のはるをーと五兩計り初穂をーと泉  
ぎつたです。どうして彼を先妻と何よき道に  
派しとげようと思つたです。

能く時節が大変化を来して善事存がとんぼう  
ぢりかからんを極にちりいふ人の直償もを  
つて来る。自ら白の意中をばけにえなまを  
のハ好まぬ。何れをせし居り行かあてる向の  
力りりやういと云う。 **か偏何の義理と云うから**

は川中。はえこそ世は后とちりうとも思ぬの  
言だ。能くばとて私しなをーと川泉に  
私せよと私つた。まあから何禮之  
居のなうちあ生とーたのであ

右の経歴二年ま。口からぬ向でありが今ハ  
年月と追と確と記憶して居らぬ。か其時の  
事を能くあて居る人ハ両方ある。在つて  
捕囚という人。ハ身失散して屯、其ぬの  
た。ハ其屋のあかとなりぬ。ハ一  
分り。ハ又一人。ハ土屋の  
と。ハ

所の川北道所では法事の直ぐ向い位にて  
所の中人のあつていらく其氏の又その想は  
から使くあつて所の方をす。同氏、此の所  
なきれえ

其氏、明治十三年まで、一度の松も、其り  
廿七歳に、来て大言一、又妻居て来て  
あり、其命を、一、其後、いと、来、  
つた、其母、死んだ、一、其氏、其見が、  
なつた、のら、だ

同の多後の、其、即、つ、い、其、母、上、自、ら、其、所、の、  
あり。

私ハ一言しいたさぬ者死に、其、  
一、其、は、と、い、う、の、  
一、其、は、と、い、う、の、  
一、其、は、と、い、う、の、

其、  
一、其、は、と、い、う、の、  
一、其、は、と、い、う、の、

二年の春、十四歳、  
一、其、は、と、い、う、の、  
一、其、は、と、い、う、の、  
一、其、は、と、い、う、の、

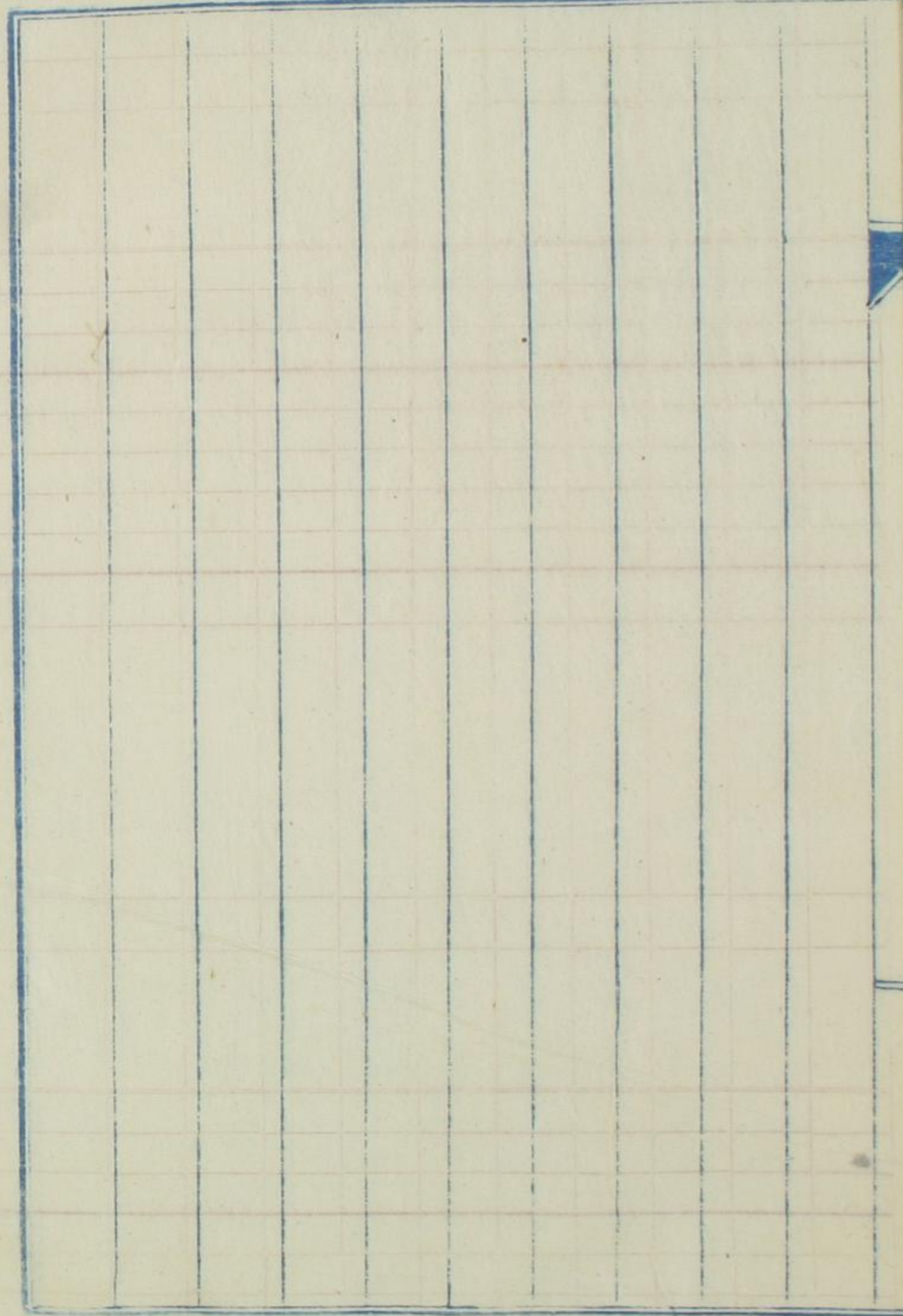
一、其、は、と、い、う、の、  
一、其、は、と、い、う、の、  
一、其、は、と、い、う、の、  
一、其、は、と、い、う、の、

夕陽を又の君の山所考の所編てあらから自ら任  
ておろすと言つて果して其を降とあつてく  
れまゝに 其時和歌の流るる言のみのみで  
ある一均の之れにあらまゝであらうといはれり  
彼を色と正しこの傳の事だ 君の終年自願  
せつて周旋して居るのをあつて居る 何の掛物の意は  
ある哉ともしまゐる言ふ勿れと言ひけり  
私に居る彼の理を断つて居る時と其言を思ひ  
鳴呼君よと黙言して一偏の涙と流るまゝに

二玉物に山間がち多で口兵につき一言いぢりませぬ  
彼が山に射うと其初が佛人らしく見えたりかえり  
おぼしき縁の材識があらはでしそなく又あるを概世の人  
下し其上人供に依りてより 彼の一時政界に努力  
をいぬたの心長脇道の親方的動作と出ぎない  
で私に彼を一個の英雄であらうと言ひますか佛  
人であらうと申しませぬ

調り帯て文部省、聘せうレタル米國音楽博士名存以專  
朝通り、和樂番ヲ品レテ其音調ヲ評セシニ製作ノ字  
節ナンハ係ラス音調ノ雅ニシテ曲節ノ妙ナルハ  
乃リモノ無シトシ甚之ヲ賞スルセリ元ヨリ此長笛ノ  
他ニ優レリト評ハ吉田ニルハ断リ、高直ノ深ハハ  
秋カノ木ノ古童カノ生カ空ノ前後ノ妙技ヲ以テ自製ノ  
奏知百出ヲ存リテ在ルヲ弄セルニ由リタルアリ蓋先年  
吹竹リ鐘愛レ敷珠重スルニ東坡老カ所君モ高直ナリ  
赴白ノ睡玉モ其以ニ非ス

一日名存氏ハ音楽部調所長ナル伊澤氏ヲ以テ先



生、清へん、彼夏如百出ヲ購ヒ得テ本國ニ歸リ廣ク  
之ヲ青樂社合ニ示シ日本ニ此種ノ良樂者アルヲ知ラシ  
メシ惟テ其値タル百金ノ餘ニ出テサレト先生世元尔  
トシテ答テ曰リ其志ヲ好スヘリ其事タルヤ歎フヘシ而テ以  
テ常操ナル一竹ニ長ク把テ値百金ト為スカ如キハ或ハ品當  
ト謂フニ可ナリ然レ余カ此竹ヲ笛ニシタルハ殆五十年ノ昔  
時ニ在リ而テ其五十年ノ久レキ日トシテ之ヲ吹カバ無ク月ト  
シテ之ヲ修造セサル無レ音ニ考一律ニ按レシテ改メ之リ  
正レ至微至細ノ極所ニ達センヲ期シ精ヲ費シ神ヲ給  
シ以テ今日ニ至レルナリ君シ此竹費ヲ以テ論セハ何リ

百金ノミナラン千金モ亦多シトセス余ヲシテ利ヲ以テ此  
最愛ヲ割ラレシモノトセハ撫ニニ因テ以テスルニ敢テ其封ヲ受  
カレヘレ抑余カ此竹ニ於テ得テ種スル妙所ナルモノハ形ヲ而  
上ノ傷を函云<sup>ニ傷</sup>ナリ又之ヲ得テ故シテ致セル精神  
ノ常費ハ無形ノ其ニ傷スルナリ無形ノ其ニ因<sup>得</sup>身無價  
ナリ無價ノ値ハ無限ナリ只其妙所ヲ解<sup>得</sup>スル者ニシテ  
始テ其無價ニシテ且無限ノ値ヲ知ルヲ得ヘシト寧ク此語  
ヲ傳テシ可クセヨ好レ此竹ヲ購ヒ得ルニ之ヲ弄スルニ其技ヲ  
シハ高リ之レカ妙所ヲ得ン若シ<sup>夫レ</sup>妙所ヲ得ルニ<sup>夫レ</sup>是レ  
其形ヲ就テ評テ視然一箇ノ根竹ノ<sup>夫レ</sup>何ヲ尋常竹管



ト違フヲ為シん豈更レ百金ヲ値ヤ余ハ女妙所ヲ得ル  
者ヲ待テ無價無限ノ値ヲ無思無言ノ間ニ推出ス  
之ヲ傳ント欲スルナリ但余ハ博士ヲ志ラ好シ又更事ヲ  
欲フナリ必ス酬ルアリントス余ハ愛知百出ヲ換シテ一管ヲ  
造リ以テ之ヲ贈ルレト

嗚呼秋古童先生ハ能リ笛ニ因テ玄理ヲ覺ル者ナリ凡  
ソ一編ハ自樂ヲ極ニ達スルノ士ニシテ宇宙ノ大音ヲ曉ルアルハ  
予之ヲ先生ノ無價ノ値ヲ論スルヲ以テ見ル呼嗟云先生ノ  
印可リ得テ此意知百出ヲ傳ル者ハ抑誰ヲ果テ先生ヲ空前絶  
後ノ秘ヲ傳ニセシカレナキ乎夫レ愛知百出ハ予戲ニ傳テ

ヘシヤハ之ヲ録シテ以テ予載ノ人ノ向テ

維時明治廿四年十二月廿一日 鳴川子前島密

竹友杲村は若年古き海より遠く跡不長宗に記せん  
 二重知百あり以て又至意の至きにあたりて各一各ナリ  
 あり一世の業一神懸此一宗に鐘心一語一うやふ  
 ありてより其て肩に記し以て之に叙る代り

浮世草子

江戸の町、室町寺の町、明治元年、奥の二十三日  
 主の聯合は信者としりて、京の寺より以ては、金に若生  
 の力に依り、ちうに、進いなし、其の況と、如く、世の  
 後に入れます。但、彼が、考の、ついで、作つた、詩、か、し  
 し、其の、言、わ、ず、自、力、を、心、て、上、京、に、如、く、又、後、孫  
 と、前、祖、と、か、と、唱、和、し、た、か、の、子、に、多、分、彼、が、持、ま、え、の、法  
 螺、と、也、の、為、め、す、る、校、檢、の、趣、を、有、り、ま、し、よ  
 廿二日、其の、況、と、明、治、元、年、五、月、に、一、江、室、町、寺、で、中、八、日、  
 口、降、寺、と、名、の、孫、の、寺、を、お、て、来、て、言、ふ、子、の、其、の、道



これに思ふに近日大坂跡在所にせりぬれりて幸に  
自かたの事おこすにけはのたぬに何ふかの便所と  
えてはは命と書せられしと  
余に二束をきこあらす物とも世に請ふる何ぞ  
は實に二束は徳の大なるものでありけりて  
らに命なる目下の大なるはひありけりて其方の  
多分の事、所となるならば考へて其情を  
とらざるに思ふれども(其情)の事なくして  
の幸福大なり一余が一身の幸福に之れを以て  
おせあるとらざるを以て二束をきこぬに便所を

彼に与えたるなり  
其束とは余に大坂行を祈りたる原宮のたぬに英公  
便所をきこりて通に切付二枚と持て居り一枚は  
縁の糸でなれりてありてこれと彼に与え且神  
の上僅に糸の交易のため、神の英公候より被  
る友人は竹籠の物として彼とけ神一巾と書姓に  
は二巾情を志くして神と依りてあるなり  
幸に何の事もなき余に神をきこりて  
彼に其情をきこりてはのたぬに

文部省

賴三樹三郎氏ノ本體骨其腕骨ノ合瘡ス  
明治四十二年十月六日賴三樹三郎氏五十年祭  
同志者ノ集合ヲ以テ東京府下豊多摩郡若林村  
ノ真善堂前ニ集テタリテ御キ社事ヲ追懐シ無量  
ノ感ニ打レタ<sup>中</sup> 往事ト何ゾアルカ<sup>中</sup> 略記スレハ氏ハ世  
人ノ知ル如ク刑場ノ露ト内<sup>中</sup> 其遺體ニ于住所ノ桐原ノ  
受刑者埋骨地ニ埋瘞セラレタ<sup>中</sup> 數年ノ後長州藩ハ  
吉田重源郎氏(松蔭先生)ノ骨ヲ<sup>中</sup> 若林村ニ於ケル下屋  
敷ニ移シ瘞<sup>中</sup> 同時ニ賴氏存他ノ人々ノ骨ヲモ共ニ田地ニ移  
瘞スニ至テ石ヲ建テ石ノ玉垣ヲ廻ラズ<sup>中</sup> 其表置テ為サレ

其時ニ方リ幕府ヲ下ノ士ニ松岡萬十郎  
一人アリ此人ハ此子問アリ又劍術ニ長シ骨格偉偉ニシテ  
諒力ニ衆ニ勝レ而カモ正義ノ人ナリ有ツタ 後ニ山岡鉄方  
郎氏関口隆吉氏ホト同志ヲ糾合シ精銳隊ト稱スル  
團隊ヲ組織シ奉命勤王攘夷ヲ主張シタ 其旨按  
ノ行為ニ多クナル又予ガ聞國論者ニシテ洋學ヲ修ムル  
諸生ナルヲ惡ミ之ヲ斬殺ヲ試ミタル事ハ如キハ本題外ト  
ルヲ以テ爰ニ之ヲ略シテ本題ニ入ルガ 松岡氏ハ頼  
氏ヲ崇奉特シ神棚ニ頼氏ノ名ヲ託シタルヲ奉シテ奉  
居タルガ故ト遺骨移轉ノ事アルヲ聞キ其行骨ナリ

トモ尊ニ取リ家ニ奉シテ親シク奉テ為スタシトノ念ヲ夜  
ニ愈々其日ニなシカ栲原ノ埋骨場ノ傍ニ徘徊シ其  
櫛ヲ窺ツタ イデ其骨ヲ現出スルノ咄嗟極然其地  
ニ現ハレ旋風ノ如ク一汗ノ眩骨ヲ奪ヒ振風ノ如ク遁レ  
去ツタ ソレ賊ヲ逃マスト故人ノ道ヲ者アリ正ニなシテ  
袖ヲ取りタレモ氏ノ諒力ノ異ホヤル彼等ヲ予鞠  
如ク扱ケ倒シテ難無リ遂ニ遁レ滑リ家ニ歸リ志願  
ヲ達シテ歡喜無量ニ日勤医リテ未タ又カラス  
シテ其事聞ケ以テ尋ニ年ニナリタレハ之レヲ私山ニ奉  
四直スルニ禮禮トニ似テ禮無キニ云キ正レ情ヲ



子之直也未異議無き方う朝若せり 予は<sup>中</sup>勝安  
 房大久保一翁氏<sup>流</sup>の<sup>中</sup>氏等<sup>始</sup>テ<sup>中</sup>アリ<sup>中</sup>ニ<sup>中</sup>  
 驚キ今又此等アルヲ喜ヒ且言ハク是ハ<sup>中</sup>下<sup>中</sup>ニ<sup>中</sup>  
 事トセス徳川家ノ公事ト為スヘシト 是ノ<sup>中</sup>於<sup>中</sup>テ<sup>中</sup>ハ  
 曰ク誠ニ好シ難クハ此機ヲ以テ得ク徳氏ノ<sup>中</sup>ニ<sup>中</sup>ラス  
 吉田宣次郎以其四石ノ田<sup>中</sup>地<sup>中</sup>ニ<sup>中</sup>墳墓ヲ<sup>中</sup>連子<sup>中</sup>テ<sup>中</sup>埋  
 骨<sup>中</sup>也<sup>中</sup>人々ノ<sup>中</sup>靈<sup>中</sup>ニ<sup>中</sup>對<sup>中</sup>シ<sup>中</sup>恠<sup>中</sup>ノ<sup>中</sup>致<sup>中</sup>ス<sup>中</sup>ヲ<sup>中</sup>彫<sup>中</sup>セル<sup>中</sup>石<sup>中</sup>也<sup>中</sup>龍<sup>中</sup>一  
 對<sup>中</sup>ト<sup>中</sup>手<sup>中</sup>洗<sup>中</sup>鉢<sup>中</sup>船<sup>中</sup>石<sup>中</sup>ヲ<sup>中</sup>供<sup>中</sup>也<sup>中</sup>ヲ<sup>中</sup>レ<sup>中</sup>テ<sup>中</sup>レ<sup>中</sup>ト<sup>中</sup>請<sup>中</sup>求<sup>中</sup>シ<sup>中</sup>タル<sup>中</sup>ニ<sup>中</sup>兩<sup>中</sup>氏  
 之<sup>中</sup>リ<sup>中</sup>快<sup>中</sup>諾<sup>中</sup>シ<sup>中</sup>タ<sup>中</sup>共<sup>中</sup>シ<sup>中</sup>テ<sup>中</sup>唯<sup>中</sup>遠<sup>中</sup>骨<sup>中</sup>合<sup>中</sup>瘞<sup>中</sup>ノ<sup>中</sup>一<sup>中</sup>事<sup>中</sup>ヲ<sup>中</sup>任<sup>中</sup>シ  
 其<sup>中</sup>瘞<sup>中</sup>施<sup>中</sup>ヤ<sup>中</sup>事<sup>中</sup>ハ<sup>中</sup>勘<sup>中</sup>定<sup>中</sup>也<sup>中</sup>後<sup>中</sup>久<sup>中</sup>住<sup>中</sup>在<sup>中</sup>所<sup>中</sup>ニ<sup>中</sup>住<sup>中</sup>ス<sup>中</sup>也<sup>中</sup>

クハ

トボク<sup>中</sup>タ<sup>中</sup>リ<sup>中</sup>テ<sup>中</sup>ア<sup>中</sup>ル<sup>中</sup> 同年十二月<sup>中</sup>初<sup>中</sup>旬<sup>中</sup>移<sup>中</sup>骨<sup>中</sup>合<sup>中</sup>瘞<sup>中</sup>ノ<sup>中</sup>事<sup>中</sup>ヲ  
 龍<sup>中</sup>施<sup>中</sup>ヤ<sup>中</sup>事<sup>中</sup>ハ<sup>中</sup>勘<sup>中</sup>定<sup>中</sup>也<sup>中</sup>後<sup>中</sup>久<sup>中</sup>住<sup>中</sup>在<sup>中</sup>所<sup>中</sup>ニ<sup>中</sup>住<sup>中</sup>ス<sup>中</sup>也<sup>中</sup>  
 為<sup>中</sup>リ<sup>中</sup>騎<sup>中</sup>ヲ<sup>中</sup>聯<sup>中</sup>子<sup>中</sup>テ<sup>中</sup>當<sup>中</sup>日<sup>中</sup>若<sup>中</sup>林<sup>中</sup>村<sup>中</sup>長<sup>中</sup>久<sup>中</sup>を<sup>中</sup>敷<sup>中</sup>ニ<sup>中</sup>赴<sup>中</sup>キ<sup>中</sup>待<sup>中</sup>ツ<sup>中</sup>コ<sup>中</sup>ト  
 二<sup>中</sup>時<sup>中</sup>許<sup>中</sup>是<sup>中</sup>シ<sup>中</sup>條<sup>中</sup>ノ<sup>中</sup>密<sup>中</sup>骨<sup>中</sup>ノ<sup>中</sup>石<sup>中</sup>櫃<sup>中</sup>大<sup>中</sup>且<sup>中</sup>重<sup>中</sup>キ<sup>中</sup>カ<sup>中</sup>為<sup>中</sup>ナ<sup>中</sup>ニ<sup>中</sup>柘<sup>中</sup>原  
 ヨ<sup>中</sup>リ<sup>中</sup>若<sup>中</sup>林<sup>中</sup>ニ<sup>中</sup>至<sup>中</sup>ル<sup>中</sup>長<sup>中</sup>足<sup>中</sup>離<sup>中</sup>ノ<sup>中</sup>為<sup>中</sup>ニ<sup>中</sup>三<sup>中</sup>十<sup>中</sup>余<sup>中</sup>ノ<sup>中</sup>人<sup>中</sup>マ<sup>中</sup>ニ<sup>中</sup>柘<sup>中</sup>原<sup>中</sup>シ<sup>中</sup>タ  
 ル<sup>中</sup>ニ<sup>中</sup>由<sup>中</sup>レ<sup>中</sup>リ<sup>中</sup>ト<sup>中</sup>到<sup>中</sup>着<sup>中</sup>シ<sup>中</sup>テ<sup>中</sup>其<sup>中</sup>石<sup>中</sup>櫃<sup>中</sup>ヲ<sup>中</sup>見<sup>中</sup>レ<sup>中</sup>バ<sup>中</sup>三<sup>中</sup>尺<sup>中</sup>大<sup>中</sup>五<sup>中</sup>寸<sup>中</sup>許<sup>中</sup>ノ  
 大<sup>中</sup>丸<sup>中</sup>ニ<sup>中</sup>一<sup>中</sup>尺<sup>中</sup>石<sup>中</sup>ヲ<sup>中</sup>置<sup>中</sup>キ<sup>中</sup>五<sup>中</sup>寸<sup>中</sup>ヤ<sup>中</sup>ニ<sup>中</sup>テ<sup>中</sup>目<sup>中</sup>を<sup>中</sup>注<sup>中</sup>シ<sup>中</sup>テ<sup>中</sup>下<sup>中</sup>リ<sup>中</sup>之<sup>中</sup>ヲ  
 開<sup>中</sup>ケ<sup>中</sup>ハ<sup>中</sup>中<sup>中</sup>ニ<sup>中</sup>石<sup>中</sup>ヲ<sup>中</sup>一<sup>中</sup>寸<sup>中</sup>余<sup>中</sup>ノ<sup>中</sup>桐<sup>中</sup>ノ<sup>中</sup>細<sup>中</sup>長<sup>中</sup>キ<sup>中</sup>出<sup>中</sup>テ<sup>中</sup>又<sup>中</sup>之<sup>中</sup>ヲ  
 開<sup>中</sup>ケ<sup>中</sup>ハ<sup>中</sup>本<sup>中</sup>ノ<sup>中</sup>腕<sup>中</sup>骨<sup>中</sup>ヲ<sup>中</sup>ア<sup>中</sup>リ<sup>中</sup>而<sup>中</sup>テ<sup>中</sup>蓋<sup>中</sup>ノ<sup>中</sup>重<sup>中</sup>長<sup>中</sup>四<sup>中</sup>尺<sup>中</sup>其  
 事<sup>中</sup>由<sup>中</sup>年<sup>中</sup>月<sup>中</sup>日<sup>中</sup>ヲ<sup>中</sup>記<sup>中</sup>シ<sup>中</sup>一<sup>中</sup>書<sup>中</sup>を<sup>中</sup>略<sup>中</sup>然<sup>中</sup>ヲ<sup>中</sup>見<sup>中</sup>ル<sup>中</sup>者<sup>中</sup>皆<sup>中</sup>



教りし流う流きたりし

出雲待信ニ詔刺一則アリ頗る當時ノ詩人社會ヲ嘲  
破又今戲ニ其文字ニ三ヲ変更シ以テ今日ノ政事社  
會ヲ評ス

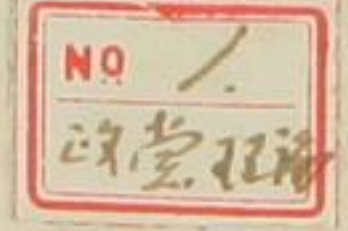
唐ノ時江陵ニ裴氏アリ其子孤ニ魅セラル術士ヲ遣テ之ヲ治  
セシム高生ナル者アリ之ヲ醫治ス居ルノ數日又王生ナル者ア  
リテ至ル高生ヲ見テ曰ク此亦孤ナリトサ遣シテ又道士アリ殊  
ル二人ヲ見テ曰ク此皆孤ナリト戸ヲ閉テ相敵テ死ス則チ道士  
モ亦孤ナリ今日ノ政黨率子皆此ニ類ス一人アリ其政黨ヲ自  
負シテ真トナス之ヲ誣ル者アリ此豈真ノ政黨ナランヤ又一人  
アリ二人ノ政黨皆真ニ非スト既ニシテ察スレバ則チ其人ノ作ス所

モ亦真ニ非ス展轉相攻ノ終ニ窮極スル無シ若シ真且眼ノ人  
ノ一睨ニ過ハ其妖形ヲ此レ所無シ矣

又

麻姑米ヲ以テ地ニ擲ツ皆丹砂ヲ成マ方平笑テ曰ク姑ハ年サナリ  
我ハ老ヘタリ復又此ノ如キ狡獪變化ヲ作ステ喜ハレナリト  
是レ上等ノ仙人ハ奇ヲ貴ハレナリ今ノ政事家流ハ此ノ奇ヲ  
出シテ以テ人ヲ嚇セシテ其圖ル我恐クハ方平ニ笑ハレシ王弼州  
云ク奇過ハ此ノ如キト知言ナルカト

明治三十二年一月  
某日



理論

改進黨創立ノ考時今亦精神タル

既ニ成ニセル自由党ノ學ヲ動リ見ルニ急劇ニシテ其言

論ヲ粗暴ナリト謂ハレハ一カラス 故ニ之レニ反抗シテ

實ナリ且徳和ナル條叙的進歩主義我ノ政黨ヲ樹ニス

ルノ肝要ヲ感シタルニ因ルナリ

然レ國會第一回ニ於ケル同党ノ舉動タル已ニ今亦精神

ニ及スルヲ見ル 尔来其形情タル益々雷初ノ主我ニ恃リ

其急劇租暴彼自由党ニ層一層ヲ加ル如シ 是ニ於

テハ亦其素の如ク全ク及ス

改進黨カ樹立ノ當時世人ハ思惟セシ此黨ハ能ク世  
故ニ煉造スルノ士ニ當リ實業社会ハ大ニ進ムル時  
ヘシト 黨<sup>何</sup>因<sup>何</sup>今ハ却テ實業會社ノ嫌惡スル  
所トナル 或ハ人ノ呼テ之ヲ破墮党トナス且故無キ非  
止ヘシ 是ニ至テ余ハ同黨ノ爲メ、補救スルニ  
余ハ同黨ヲ爲メニ進ムルカ必ス以失望ニ補救トテ療  
セザルヘカラス 之ヲ療セントスルニ必ス事ヲ所アリサレハ  
カラス 之ヲ事ヲノ極ハ大敵ト疾呼スルニ他ニ向テ新<sup>鳴</sup>ハ  
所アリニ至ラン 苟モ他ニ向テ其争且ク鳴スニ至ラン同  
黨ノ不利益ヲ發生セン 蓋曰党今日ノ勢ハ騎虎

ナリ如何ニ是レト事ヲモ決シテ下ルヲ降(カラス 今ハ已ニ  
下スヘキ時ニ非ヌ或ハ其機ハ他日ニ在ラン乎否曰党自  
ラ下ルノ時機ヲ製スルニ非ニハ何レ日ニ之ヲ見ン  
余ハ曰党ノ宿敵ナリ余ハ彼ノ一舉一動ニ於ケル毎ニ喜  
憂スル者ナリ 故ニ彼ニ利也非ニモ彼ニ一害ヲ加ヘザルヲ  
慮ス 党外ノ人ハ世ヲ争テ余ヲ改進黨ノ勢カア  
ル自外ノ一員ナリト誤想セリ 或ハ曰党員ノ一分又ハ  
曰党ノ政在中ニモ同リ誤想ヲ抱ク者アリシテ而テ其誤  
想タル何ホカ、利ヲ曰党ニ与ヘ居ルヤモ知ル(カラス 全  
ク其利無シトスルモ居ン余リ公言シテ失望ニ補救スル所

以テ鳴スニ於テハ八まり其害無シトセス 是レ余ガ政丹  
ニ向テ一蹴ヲ置ケス一言ヲ發セス白眼台上青松下ニ悠々  
閑日月ヲ流スルノ其無キ許以テリ  
或ハ日汝ノ齡已ニ老タリ日將ニ暮シトス何ワ悠々前庭  
表キテ望ミシテ余ハサレリ恥ヲ知ル者ナリ 所謂無  
竹節無操論作友霞以テ去テ彼ニ就キ而テ十九世紀ノ政  
治ニ入りト 諺言スル者 窓ハ者ナリ 握槊トシテ名ヲ  
博センヨリ寧ク優游シテ性情ヲ安ロシテ秋ス但舊盟ヲ  
再諦シ 韓語スルノ好將機アリハ直ニ起テ同党ノ門ヲ  
扣キ以テ覺ル末ニ列スニ 諸語ヲ并ルヘシ

甘多ノ事ナリトシテ難キヲ知ル 一日 廿五年 六月 奉リテ説ク  
ニ大政ノ優越ヲ以テレ其言ニ曰兵大政ニ在リテ凶逆自  
適ニ起臥シテ可ナリ 別ニ党事ヲ以テ煩ス(キノ一語也  
無シ 秋軍攻西ニ遊視スル者有リ在政ノ事ヲ語リ時  
或ハ利用スルノ云々ト 是レ又此ノ目的ナル事決シテ  
然ルニ非ルナリ 日竟儀ハ西南地方ノ党勢ヲ統攝スル  
ノ為メニ大政ニ鎮台ヲ置クヲ要スト即チ余ヲシテ之ニ  
當ラシムルノ余儀無キ場合ヲ生セシメント謀リタルナリ  
余ハ自ラ起テ此党事ニ参ラント欲スルニ七日余ハ財政ハ  
之ヲ許サヌナリ 余ハ明治十六年ニ之ヲ試ミシ事ナリ



ありしに何の因に道人は於其体は  
 破れり亦り改め日之故に夜之故に暁  
 之將に死せんらるるに方り其腸中其積  
 汚新の錦繡ヲ嗜む吐し其自内鏡ナル大  
 篇ヲ著せり佳哉道人、故世人  
 とよみ故ハカレモ願人情世態ヲ等ナ妙  
 斯う字に世ノ後者ヲシテ其瓊樹ニ故  
 二府セシム亦碎ナルカト道人、故戲謔

問：初利ヲ為セ或は宗教ノ玄理ヲ使高  
 會ミ已レハ故有冥語ヲ以テ他世人  
 自碎教言解之嗚呼故ニシカト死セン  
 カト極テ故一ニハ醒ルノ隣死ハミレシ涅  
 槃ノ業地ナリ故、故醒ノ境ニ遊ヒ  
 生死ノ界ヲ脱出シテ神身石云無快  
 楽ナル以道人ノ空相之自内鏡之現照  
 あり余モ亦道人ノ体之一故陶然自得

後自由...  
五月 陽の族人 故衣ニ徳ス  
明治二十一年一月十

電気ノ美的現象

夫レ電気ノ靈妙ナル微ハ無間ニ出入レ大ニ宇宙ニ遍満  
時ト地トヲ撰ハス機噐ノ具ハル所ハ忽チ感應レテ  
不測ノ力ヲ現ス然レモ這ハ是レ智巧ノ解説人等及  
フニキ界域ニ属ス 彼ハ皇天ニ化育リ大機ヲ持具テ  
無量ノ生物ヲ生れ育スルノ神妙不可思議ナルニ至テハ  
言語同シク断ヘ唯神トシテ讚美セシメ  
余ハ久シク其靈徳ノ廣大ナル慈恩ノ無邊ナルヲ讚  
美歌頌シテ措サリシニ一夕空虚無際渺ノ間恍爾ト  
シテ斯神ノ形象ヲ幻感ス 其顔ハ温然トシテ百花

電気

神

形象ヲ幻感ス

其顔ハ温然トシテ百花

千卉ヲ明々ニ春先ノ如ク其容怡然トシテ  
生ク愛撫スル慈母ノ如ク而テ其半身ヲ並漢賦  
溢タル雲間ヨリ顯ニ露注ナル眉宇ノ間ヨリ閃爍  
タル一靈光ヲ射出シ吾等ハ天ヲ承ケテ造化妙  
玄ノ神機ヲ載セ左掌ハ地ヲ覆フテ萬種生物ヲ  
愛撫スル状ヲ表ス其優其美直ニ至リ天ト謂ハ  
ンノミ

是ニ於テ余ハ其幻感セル美的現象ヲ賦シテ一ノ神  
像ヲ描出センコトヲ企望セリ 此ケハアソビエト云ヘ  
ルアリ凡ソ事物トシテ美的繪畫ト爲スヘカラハルモ

ノ無シト謂ニ然リ洋ノ東西古今ヲ論セス自然人  
事トモ係ラス超絶偉大ノ動機ニ之ヲ美的ノ形象  
ニ寓シ神トナスモノ甚タ多シ文學ニ藝術革命自由  
ノ神ノ如キ山宣夫レ有體具相ノ神ナランヤ皆其妙  
處ヲ冥想シ之ヲ象形ニ寓シ如モノナリ 斯ク云  
ハ不思議ニシテ廣大無量ナル靈徳ナル靈氣ニシ  
テ之ヲ神トシ之ヲ賦シ以テ讚美歌頌セザル可シヤ  
至思之無キハ美術上ノ欠典トモ謂フヘキナラン 因テ  
自ラ揣テ試ニ畫ル其某ニ屬シテ之ヲ稿セシノ際  
リ世人ニ示シテ以テ其評ヲ乞フント欲ス



明治三十二年春

電気の美的形象

嗚呼偉なるかな電気の力神なり可なり其徳  
 一針頭の觸る所百尺の堅巖以て覆をへ  
 く千里の遠信一瞬以て通をへし或は光明  
 焯燦黑暗を照し圓轉疾徐其機に應して工  
 作を便に其力を及ぼす所既成に就て計  
 り子違あり其將來を推し豈測度の限な  
 らんや實に偉として宏と謂ふべし然と  
 し是事は人智の作用を待て而も其功を奏  
 するの未だ之を最偉と宏と稱すべし

夫若夫電氣の徳たるや圓通自在至玄至妙  
不思議の靈核  
の靈智を以て造化の參照し大慈博愛を素  
として吾人萬生の養育を補導を其功之を  
何とか言ふ只是も神と稱せんのみ 是に  
由て予は斯神徳を理想の母とし其形象を  
美的に描き以て嵩敬讚美せんと欲せり久  
し 一夕縹緲虚無の界に白衣觀世音の像  
を似て慈眼視衆生の相を具し而かし端然  
凜字侵を一からざる威嚴を蔵し其右掌は  
天子承て化育の靈機を載せ左掌は地を伏

せ萬生を愛撫するの状を標せる婦人の眉  
間より屈曲光線を發射し其半身を憐愍た  
る黒雲中に明滅するを瞥見せり 惟ふに  
是予が所想の深き夢寐の間を偶視せる電  
氣の幻影ならん 昔者之ヶ口、ア、ン、ジ、エ、口  
言アリ曰く凡事物として美的繪画と作し  
能さる無しと實に然り古より文学工芸華  
命自由其超越偉の績は之を神とし美的  
標章の像を作為せるもの斯しとせず 今  
や世は電氣の靈妙を視証を而て未だ其表

象を造出さるの議あるを聞かざるは甚し美術  
 上の一欠点と謂ふ一きならんか 是は於  
 て予は自ら揣らる此暫見せり 形象を本と  
 し試み友生西田春耕に囑して一の画稿を  
 描寫せしめ之を以て世の同好者に教を請  
 んとを幸ふ岳教有らば豈膏獨予のみの本  
 懐ならん 明治某年某月前島密

岡山兼吉君の集

花樹春芳夕央ナラスレテ 狂風幹ヲ折リ 嘉穀將

ニ秋ナラントシテ 陰雨地ニ委ヌ 黯澹タル天地寂莫

タル光景嗚呼造物ノ情無キ 塵世ノ常無キ何リ

斯ノ如ク其レ甚シキヤ余ヤ君ノ訃音ニ接ス直チニ

趨テ遺骸ヲ拝ス 温客依然微笑ヲ銜テ 眠ルカ如

ク宛ニシテ君カ生時ニ在リテ 敦厚衷和温然物

ニ對シ人ニ接スルノ状ヲ見ル而テ 今ハ則チ空シク一座

靈位、以年特事甚多、此有為、人、レ、此  
 有為、時、亡、了、豈、天下、國家、為、痛、惜、也、廿、八、  
 二、也、豈、添、夕、几、天、地、寂、寞、夕、几、光、景、花、樹、幹、折、  
 穀、地、夫、夫、又、嗚、呼、哀、哉、

本年本年本日 前島密魯首再拜

年	是	常	大	社	包	年	貨	明	佐
某	以	陸	而	則	郵	大	之	治	々
日	立	真	率	夙	便	備	便	之	木
設	社	壁	先	風	則	秋	則	初	莊
社	之	郡	往	先	有	輸	待	官	助
負	初	下	官	官	於	貨	於	設	君
追	推	喜	行	行	內	帶	內	郵	碑
悼	氏	人	焉	焉	國	則	國	便	
欲	為	未	其	其	通	有	通	通	
建	之	東	曾	為	運	郵	公	信	
碑	社	京	為	國	會	便	社	簡	
以	長	事	家	家	社	為	蓋	易	
表	後	鉅	之	之	蓋	替	通	民	
其	任	高	用	用	通	致	信	享	
功	之	吉	不	不	信	物	制	其	
顧	以	村	可	可	制	品	度	利	
內	明	甚	謂	謂	度	則	至	能	
國	治	兵	不	不	至	有	乎	至	
通	某	衛	重	重	乎	小	運	乎	
		氏	且	且	運				

鳥 八

不  
書  
NO

此は... 新... 先生...  
 不... 此... 先生...  
 先生... 先生...  
 先生... 先生...  
 先生... 先生...  
 先生... 先生...  
 先生... 先生...

白雲岑々	其性深沈	余而誰銘曰	者吉村氏而	所以不可已也	測而君能堅忍	利加之道路未	匡會社之起在
绿水湛々	當事能任		所師事者前嶋	欽君嘗屢從余	不屈遂成之其	完舟車未備創	明治五年當時
長松之陰	謙恭為心		君也則可銘君	事每曰吾所父	功勞如此是建	業之難非可以	世未知合資諸
大江之溦	接物正襟		碑者非	事	碑之	今日	社之





名うた人おのちらぬらぬら三徳なりぬ儀らなれ  
 典望之高き天壽村の光なき老石と初ノ皆只許  
 之所こころしとあり  
 少年の對一カ多き事所ノ要概ハ古ノ道ノ  
 あり斯う福ハ何と云ふに及ぶ事と傳りた  
 尸亦、極多本心ハ憚愧と覺、染ノこ世極に  
 カ野卑心あり、儼ハ無さる何事只此ハ空教  
 以推るこころ、若生ハ冥ニハ世世ニ生じ帝心ハ通  
 信子母ニ生じ若眼解幸と共多き事、就ハ  
 其力と改まの極分と成て生じ申受ありとい

於にわらわるべきに起るとも、征清に後之於て赤  
 十字社と海軍振興會ノ事ハ心之れ成る者ハ  
 實際軍ヲ備へ、必要ニハ之其効あり、若ハ振  
 興會ノ事ハ十字社ニ倣せり、其信ハ至リ、  
 其心ハ兩方人モ、若らう通一トあり、故ハ心  
 一ニ思費ニし、所ハ不中ハ  
 此祝ハ如ク岩崎氏ハ信厚也ハハ教ニ就クハ法厚也  
 或ハ重き方ニありト云、高船海軍事典其口氏  
 之儀、就其功ト云、若生ハ其方所ハ古  
 今云、其功其事、信然と云、其功ハ所振多き事、

帝は徳壽を以てとす。徳壽は年を  
 成るる功に之を名をもて相も多羅のちらまし  
 過きりん王との祈り。但今よりまじく信作天  
 子愧を眠起毎に快然と覺、千歳に先旨に此  
 言を傳きしる具

二七日

自らの吹き  
 廻らなれども  
 ちりて居る者  
 し忘れし志  
 まり野て居  
 こゝに依る  
 の廻らぬと  
 先づの面  
 ありしは向  
 ありしは向  
 ありしは向

中は七半、後子世れぬの、何れに御か、いや其に  
 自れし知らぬが、政府子に、か子をよく知て居る者が  
 ないのが、一で、己七か、一七知らぬ、格三、四らぬのが  
 亦二であらう、大隈伯は、りり、粗知て居る人、らいた  
 りれた、いら、大隈伯は、りり、粗知て居る人、らいた  
 と存する、なの仕向、己七か、一七知らぬ、格三、四らぬのが  
 中、言は、御て、七、言、い、己七か、一七知らぬ、格三、四らぬのが  
 な、い、大、姫、た、其、福、披、に、己七か、一七知らぬ、格三、四らぬのが  
 所謂、還、慮、中、己七か、一七知らぬ、格三、四らぬのが  
 事、お、子、申、し、言、方、と、よ、一、た、る、が、有、り、己七か、一七知らぬ、格三、四らぬのが  
 其、分、一、二、或、力、新、心、残



二ふむか子壽を授けらるゝか又さるゝか而然たよか書  
 いはのあり又らんなると言ふ人し海山ある男故に正の  
 死んばなら花鳥をまゝと見換なる軍勢一と云ふ人し  
 有ふし知れぬ故にらんなるのそい様子花鳥なり  
 こと人子替るなり死んばなり直に昇り昇心論のから後  
 五人とし若知らせよ一子若るゝい海山なるか若た  
 なり自分か死んとの後の事なり何の關係もなし而して  
 小集いの命論なり子孫の世運成り事とあらふ程に其  
 言とそれと祀と遊と也ある  
 何難の 剣没まかりて七事大張るゝき價かあること

ことさすけは  
 いうらむん  
 死しと云ふん  
 のしをま  
 ことえん  
 考ふん  
 いのちなり

二フンありかもし知れん政府としをいふしか一七氣付ぬ  
 ありは子とせり出し一五難と記し其世帯と余の外世政  
 社上と世帯の條はと締一秋那と連役しある條はの報便  
 ると撥せしめ秋と権と緋とらると、侍言の如き様  
 におろか忘おまゝに、中集と御あそむのちうと成然  
 一今の政府の者としは、知らぬか忘として、此のたうと  
 海國のころ、其のうよ、山、塔、海、つら、ま、わ、あ、る、と、男  
 者、と、な、り、た、う、名、無、の、事、業、と、剣、の、目、判、を、連、て、岩、崎、不  
 と指道すしと世帯を成さし、わ、た、ま、あ、る、の、種、を、培、養、し、て  
 集話としよらぬたむ十段、い、る、を、と、唱、末、と、父、け、て、信、者

こと  
 こと  
 こと

の賢人は世間を知りぬのにおいの日々の風はよきそありに控し  
玉も礼のりてしをい

十年西南の役のソウソウそそいの前敵であらうよ。由功

口と代理して徴多存と積る者と徴集して

戦地に至りて川路大難と後援乏しく新撰兵を以て

口代理の丹田が将と傑し一不意に戦の陣地を推し

新撰兵と積るものと積るものと積るものと積るものと

花の口と代理して徴多存と積る者と積る者と積るものと

賜に戦地はさう言ふ大きなさうありければとて丹田に信

し失せておそれの外に誰れ知らぬようには大隈はあてはるかし

た心地方の士族と臣意がよよかた内か危殆にさらし

より三多の難を信うと鏡と信うと信うと信うと信うと

志らん。正か常事と信うと信うと信うと信うと信うと

た世帯を解う之れ。憑て眠つたえらいたとてよかヤンヤと

言ひてななり一棟の子たりうよ。けとともいふまゝらん

るを陳へまの極々短か。畢竟とていふはらり分とあし

多く致し。物り自ら快く起臥して起臥すると信ふに北朝

を信ふに其れと如坐と信ふに其れと信ふに其れと信ふに

まはるるか。ウシまたりりりありありありありありあり

新撰兵の時。其時未だ世間とて其の後をさす時

一高松の後敵と。由はるる大由子

一電報子業の副。其の業は此の時とて其の時とて其の時と

一日の海を渡りて其の時とて其の時とて其の時とて其の時と

一其の時とて其の時とて其の時とて其の時とて其の時と

一其の時とて其の時とて其の時とて其の時とて其の時と

一其の時とて其の時とて其の時とて其の時とて其の時と

一其の時とて其の時とて其の時とて其の時とて其の時と

一其の時とて其の時とて其の時とて其の時とて其の時と

此の時とて其の時とて其の時とて其の時とて其の時と

一其の時とて其の時とて其の時とて其の時とて其の時と

一其の時とて其の時とて其の時とて其の時とて其の時と

一其の時とて其の時とて其の時とて其の時とて其の時と

一其の時とて其の時とて其の時とて其の時とて其の時と

一其の時とて其の時とて其の時とて其の時とて其の時と

一其の時とて其の時とて其の時とて其の時とて其の時と

一其の時とて其の時とて其の時とて其の時とて其の時と

一其の時とて其の時とて其の時とて其の時とて其の時と

世間は常事と信うと信うと信うと信うと信うと

此の時とて其の時とて其の時とて其の時とて其の時と

此の時とて其の時とて其の時とて其の時とて其の時と

父方人の西暦三十年(弘仁)と知らぬ事だが、神代本の  
長野(一)書卷(一)の一人の馳走せられた時、マゴロの刺身か唐  
子いりくすろふえ之を誇り、マゴロの馬子マゴロの生肉を  
はいりくか各くす味毛一よことであつたは、マゴロの生肉を  
毛馬子である贈る氣大に、マゴロの生肉一切をいぬのであ  
る而して、マゴロの刺身の越後のまは、マゴロの生肉を、マゴロ  
であるを信越の境界とい山話の事也。他々、マゴロの生肉を、マゴロ  
魚河岸よりたは、マゴロの生肉を、マゴロの生肉を、マゴロ  
の山の子、マゴロの生肉を、マゴロの生肉を、マゴロ  
長野の姑く言つす上、マゴロの生肉を、マゴロの生肉を、マゴロ



玉のし新餅と魚と料理しはちと<sup>んた</sup>は<sup>んた</sup>は<sup>んた</sup>は<sup>んた</sup>は<sup>んた</sup>  
 物なりと謝禮の状を賜ゆる言際とひらたのてある  
 附言口新原馬車分社に大に事致さば一語告せしに  
 送し彼の質物とし( )揚するに<sup>んた</sup>は<sup>んた</sup>は<sup>んた</sup>は<sup>んた</sup>  
 此の間に便定とよ( )に<sup>んた</sup>は<sup>んた</sup>は<sup>んた</sup>は<sup>んた</sup>は<sup>んた</sup>  
 劍めたりてある

侯素の清徳を保全するの一路

余は度々三年幕府の東となりてう侯素を守り  
 侍給の成分を野暮せんと心持けた 尚時吏人の野暮用  
 心なりハ賤視せられた風儀をうけた 去れと余の之  
 反對の観念とえ兼持つて居た 何せや水の清徳ハ  
 必し今更之に傷れ易きもの御身衣食足つて禮  
 節と知らぬの極言は伸し書す( )と此言の如くであ  
 り候様をせりす極高を訪はす佳自ら節を弄  
 弄せりて法を俾りて唱致せりむら如きで慥然するのみ  
 何れの冗費としをく( )て弄られたれどもは<sup>んた</sup>は<sup>んた</sup>は<sup>んた</sup>は<sup>んた</sup>

は幼少なりけり 余の明は十四年ニ退官<sup>自</sup>は<sup>中</sup>は  
即ちの頃と除き僅に<sup>一</sup>生四万石と貯蓄<sup>一</sup>は<sup>た</sup>の<sup>で</sup>  
あり <sup>を</sup>此<sup>より</sup>ブ<sup>ラ</sup>ク<sup>と</sup>言<sup>ふ</sup>業<sup>界</sup>ニ<sup>初</sup>き<sup>出</sup>て<sup>後</sup>強<sup>く</sup>  
古<sup>に</sup>新<sup>め</sup>て<sup>見</sup>任<sup>が</sup>サ<sup>レ</sup>く<sup>は</sup>所<sup>が</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>て</sup>七<sup>五</sup>人<sup>輩</sup>や  
親<sup>戚</sup>な<sup>ら</sup>む<sup>の</sup>為<sup>め</sup>に<sup>損</sup>之<sup>す</sup>り<sup>多</sup>か<sup>く</sup>て<sup>我</sup>た<sup>富</sup>あり<sup>と</sup>  
は<sup>な</sup>ら<sup>れ</sup>ぬ <sup>吾</sup>富<sup>あり</sup>と<sup>言</sup>ふ<sup>の</sup>は<sup>初</sup>き<sup>を</sup>以<sup>て</sup>其<sup>の</sup>財<sup>を</sup>  
り<sup>世</sup>人<sup>の</sup>海<sup>受</sup>と<sup>交</sup>け<sup>ぬ</sup>れ<sup>の</sup>生<sup>活</sup>と<sup>為</sup>り<sup>自</sup>ら<sup>觀</sup>て<sup>一</sup>旦  
清<sup>白</sup>と<sup>傳</sup>わ<sup>れ</sup>と<sup>多</sup>く<sup>一</sup>て<sup>生</sup>を<sup>保</sup>は<sup>ら</sup>む<sup>た</sup>け<sup>の</sup>財<sup>を</sup>産<sup>を</sup>保  
て<sup>ば</sup>足<sup>ら</sup>ぬ<sup>の</sup>で<sup>あ</sup>ら<sup>ず</sup>

振りなり見てや嬉しき杖<sup>は</sup>の曲<sup>ら</sup>りけり<sup>神</sup>雪<sup>の</sup>後

自<sup>日</sup>は<sup>移</sup> 精<sup>神</sup> 北<sup>は</sup>見<sup>ば</sup>

高田居屋下

新日本十二月号ニ加藤<sup>如</sup>之<sup>の</sup>大隈首相ニ寄<sup>り</sup>て<sup>國</sup>定<sup>教</sup>  
科<sup>書</sup>の<sup>調</sup>整<sup>ヲ</sup>請<sup>ふ</sup>ス<sup>一</sup>文<sup>ヲ</sup>掲<sup>載</sup>セ<sup>り</sup> 大隈伯<sup>ハ</sup>之<sup>ヲ</sup>對<sup>し</sup>て<sup>答</sup>  
<sup>答</sup>ハ<sup>表</sup>セ<sup>ら</sup>れ<sup>ル</sup>ヘ<sup>ク</sup>余<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>必<sup>要</sup>ト<sup>存</sup>ス 而<sup>テ</sup>其<sup>の</sup>答<sup>論</sup>ハ<sup>何</sup>レ<sup>ニ</sup>  
執<sup>テ</sup>ハ<sup>此</sup>等<sup>の</sup>政<sup>事</sup>家<sup>等</sup>一<sup>般</sup>ノ<sup>議</sup>論<sup>ニ</sup>倚<sup>り</sup>一<sup>種</sup>不<sup>可</sup>思<sup>議</sup>ト<sup>問</sup>  
題<sup>ト</sup>シ<sup>テ</sup>可<sup>カ</sup>ト<sup>存</sup>ス 故<sup>ニ</sup>其<sup>の</sup>答<sup>論</sup>ニ<sup>就</sup>テ<sup>ハ</sup>是<sup>レ</sup>下<sup>方</sup>ノ<sup>最</sup>ニ<sup>慎</sup>  
ニ<sup>重</sup>ナル<sup>ハ</sup>注<sup>意</sup>ヲ<sup>以</sup>テ<sup>内</sup>閣<sup>ヲ</sup>マ<sup>ウ</sup>シ<sup>テ</sup>黨<sup>義</sup>任<sup>仕</sup>ス 此<sup>レ</sup>問<sup>題</sup>ハ<sup>レ</sup>  
小<sup>の</sup>早<sup>稲</sup>田<sup>大</sup>士<sup>等</sup>ノ<sup>陰</sup>謀<sup>ニ</sup>影<sup>響</sup>シ<sup>大</sup>ニ<sup>内</sup>閣<sup>ノ</sup>往<sup>後</sup>ニ<sup>自</sup>主<sup>ニ</sup>  
根<sup>基</sup>ニ<sup>關</sup>聯<sup>ス</sup>ル<sup>事</sup>ヲ<sup>不</sup>容<sup>易</sup>ト<sup>ス</sup>ニ<sup>及</sup>ボ<sup>ス</sup>一<sup>ク</sup>ト<sup>存</sup>ス 猶<sup>且</sup>  
伯<sup>力</sup>身<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>ル<sup>抑</sup>身<sup>裁</sup>ノ<sup>識</sup>見<sup>ハ</sup>任<sup>何</sup>ナル<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup>忠<sup>臣</sup>ナル<sup>勤</sup>

モスレハ感几方面ノ境者ヲ更ニ述ニ就キ現今ノ形勢ニ照  
シ深遠ナル思慮ヲ要セザル可ラスト存ル 付度ニ加算カ  
此際ニ方ク此語ヲ公表スルニ単ニ彼ノ有語ヲ云為スルニ非ス或  
ハ其意ニ一ノ爆輝ヲ埋掩シ其導火線トセルニ非スヤト迄  
秘存ス 湘南港底ノ老翁商翁ニ世間並ノ憂懐一ス  
且下ニ向テ副表ヲ訴ヘ何トゾハ深慮可被下ク致首

后

本校ニ長瀬及本宿満場ノ諸君

本日も日本海自振済会を代表して卒業生諸君而シ其

卒業ノ榮を祝賀スル事前リテ燕辞を演へ保て本會の將

来諸君ニ向テ有る所の眞摯を一言ニ満場各位の清聴を

煩ハス

在り百般の事務を掌理スル者ニ在りて一往を多ク所至一と

謂ハ可一着ニ就トモハ控をもち所何重と云ハレ今ハ喋をもち

の要を<sup>もち</sup>但甘言を爲すの國東よりハ社會ニ直チニ関與する所何

カハ於テハ自ら往來せし能ハレハ航海及海陸上博識の公子の如きハ

是亦社會ニ直接の関與を有するハ頗リ重且大なりと謂ハ

可しき而て之を官地に施し用りたて他多々此に  
至難しし且其地の大なる言を得たりとて其地を  
の院とて之を最重の人命財産を安んずるに  
富強社人等の便益を進出せしむるに  
其日業に難しき所あり今や諸君に其業を  
言して其の難しき官地を就く及一り追時  
附の海に航し大に進みたり諸君に勵精一  
志を以て此先業なる或典を祝賀し併に  
其業に難しき所あり

本会が將來に諸君に而て冀望する所は之を止らざるに誠  
意熱心と以て之を依頼的の業と有するなり本会に諸君に  
由知事有らんる等々海に即ち水火まぶの厄を禱し又  
彼等の権利を保護し其疾病を施療し(年額七千円余を費  
し)或は彼等を養成し(正業の成りたる者八千人余現に養成中  
者五百人余)常時非常時の用は供せんとす社会の爲め  
めつたる者なり且その業の頂を挙げ十三何れ然し  
之を一言して之を日本の良海負を得んと欲するの外なき  
所は良海負を得るの方法は種々ありしと雖も究竟は所  
に彼等を率ふる所の長上の人を薰陶し頼るを最要とせらる



元来彼亦多く学校の主君あるに非ざる如何に百子言を以  
 て道理を説く其心願を洵化し得るに難し<sup>難</sup>其<sup>難</sup>年<sup>難</sup>到老<sup>難</sup>  
 洵の力を依り可らざる長上の人々肅然たり威儀凛然たる慈  
 愛即ち嚴師父の子を子に於けり如く其量洵感化に依  
 頼せざる可らざるなり<sup>難</sup>其<sup>難</sup>年<sup>難</sup>到老<sup>難</sup>  
 所の意を爲く後世に之を興し以て其<sup>難</sup>年<sup>難</sup>到老<sup>難</sup>  
 後之臨て一言を私本校の前世界<sup>難</sup>其<sup>難</sup>年<sup>難</sup>到老<sup>難</sup>  
 時微なり一学校の時運の擴進と考ふる者の丹精を憑り<sup>難</sup>  
 壯大の一大学校と成之て本日の如き盛典を舉げらるるに<sup>難</sup>  
 而して其式場に出て此祝辭を深々と得るに實に歡喜する  
 所なり

学制改革の議に就て其後考へるを

近ごろ学制問題が盛んとなり考ふる者も其路正按を出  
 し或るを体し修正案を呈して或るを人の議の上らんと  
 の言しあつた 是等は教育上から論ずるの事あり強  
 論上から議する事あり又学科の程度や学校の数など  
 どのよつて言ふ所の事あるが其案はといえは学校の年  
 限を短くし或るだけ早く用ひまつ人物を學ぶるより  
 したいと謂ふ一は子歸するものである 實に<sup>教育</sup>の<sup>家</sup>字  
 且もその間を容易くして早く用ひまつ人をゆるしはれり  
 けりななり 富玉の第七層兵の略し文學と工藝と皆



此毒子あたつて今日の在極となり此毒を去らねば  
して安眠をとなし能わぬこととちつて居りよお知  
のあり 其れのみならず昔西漢の武帝按し此根本  
大改革が行はれ自ら解使さりと云つて居り  
と思はれり かの玉雅と思えり大改革であるから  
年月を延ばすと思はれり 徳意を以て居るから  
或は果端し或は途程しと居るから ありし此  
根を改革が行はれしと云ふて 目下の急を如何せん  
其れ急の急となりし 其れを急と云ふらん  
但望むらくは其れと同好し 此改革の問を子力を改

して興隆を興起し政府を新かしよく其の機をばさ  
み勉て勉しい 此改革利権者が其の目的を達する大  
手ぬである 必しも其の急の附人々が其れと云ふ  
き路であらう 況や玉雅と思えて其れ玉雅の景  
でよく徳意し見えて其れ急の時と云せぬ 回極  
かの急染しなるも風を吹いてサツと云ふれ  
二十一年の戦いも完全成就と見らるるやと云ふ  
其れをうらなれ 況や玉雅と思えて其れ玉雅の景  
後み其れ一容易く其の附人々が其れから其れ急の時  
の急なり 外玉雅の急を急し其れ急なり 急

たま即語を後語にて流るる漢字を用ふ者七多と云ふ  
初めて流るる漢字を生み 亦明の語の多と云ふ  
乃の故ハ信一とめ一も物多とい

文字一定に廣り世に流るる否やノ私按漢ノ種

が故ノ善美とテ文字ノ何レヲ決スルハ不考ナリ 之ヲ廣ク

此子者政治家の天機を以て流るる衆語ヲ劇ク以テ之ヲ宜ム

シトノ説アリ

按スニ其説甚ク可似テ其言甚不可ナリ 若シ之ヲ證

世上に借問セハ異論百出 然るに何レノ年ヲ期シテ一定

スノ場合ヲ得ヘキヲ知ルハナラス 蓋シ今ヨリ十年二十年

ヲ過ケルモ一定得テ得ヘカラス 何トナレハ之ヲ一定スヘキ

機刺をケレハナリ 漫興論に偶々勿レ興論ヲ表スルノ

準拠無シ者言者ノ多故ヲ取ラニ予多サヲ量ルヘキ準

答云ハナリ

必竟委多ハ異説者ノ攻撃ヲ受ルニ過キサル止ムハ  
且攻被ヨリテ到底異説者ニ免レ能ハル所ナリ 若シモ  
廣ク論キ多ク誇リハ其攻撃ヲ大ニスルニ

或ハ此其者自ニシテ一定見ヲ之テ元按トシテ提出スルハ  
次ノ調査會ニ多岐ノ委負ヲ漫拵スルニ至ルヘシ 仮若主  
義ノ人ヲモ新字主義ノ人ヲモ羅馬字主張ノ人ヲモ撰サレ  
ハヤラス此異主ノ人々ヲ集テ之ヲ議セシム廣ク世ニ傳ル  
ト同様ノ態ヲ為スヘキナリ

勿論廣ク論多ク誇リハ其中心ハ妙論卓説ヲ得ルニ在リ

死ナルヘシ 然レハ之レニ文字何レニカ一定ノ後之ヲ傳フ之ヲ論

ナ妙論卓説アリハ之ヲ採容シテ脩止ノ具ニ供スヘシ是ハ

目下数年ノ事ナラス永ク存ルヘキ事ナリトス 惟テ他

日學士會トカあひびハトカノ不新ノ事業ナリトス

事ナリ

此ノ如ク論シ去レハ本委員ニ暴断擅決ヲ欲スル如クニ  
論エシト決シテ然レニ非ルナリ 何レノ巨ヨリ撰セ何ナ

ル見識ヲ以テ論スルニ文字ハ仮名ト羅馬ノ二ニ出テス 新

字ハ孰シと取ラレ、傾向無ナルヘシ (故ニ廣ク傳ルヘシトノ傳

ハ生ヌヘレド 本委員ニ領マテ一定不極ノ不可アレバ更ニシテ

可なり) 然るに何れも四維ニ文字ニ就テ長短ヲ比較シ世ヲ  
採用スルハ其地ニ如何ノ損益アルヲ高量シ其長スル所  
益アル所ヲ採リテ之ヲ原案トシテ提出スルハ是レナリ  
元来本意負ホノ原案ハ先以文部大臣次ニ内閣大臣  
ニ 陛下ノ聖断ヲ仰リ(キ)原料トナルモナリ  
但本意負合ハ即レ一ニ定ムルモ其理由ヲ詳ニ長  
短相違ヲ明ニシテ之ヲ詳細明瞭ニ記載シテ(其意)  
採リテ之ヲ五字ト爲シテ款ス然レ其款断ハ  
取明レ此意ニ在リ(レ)得テ如何ニ言フ 陳ルヲ字スレバ  
新案ノ意ヲモ附記スルハ勿論ナリ(レ)

国字ノ一定ノ如キニ其後ノ趋向ニ無後ノ趋向ニツ分  
ツク現立ノ利害ヲ將來ノ如何ヲ觀テ政府存案口  
主上ノ獻断ニ任スル意ナラス 後世子孫ニ永ク其徳恩  
ヲ遺スルノ最大ノ善ヲ爲ス事トシテ(其意)毫末モ其弊ヲ  
遺ス事モ其弊ナレハナリ  
前出ノ如クナリトセハ此原案ハ本意負ニシテウラ  
可トシテ疑ハナレナリ又何ノ攻撃力之レニ生セシ  
生スルモ何ノ意ヲスルニ足レモナランヤ 唯新字係  
者ハ怨恨ニキ能ハスナレリ議係ハ者レ(キ)ナリ其  
意ハ是レ本意負ナリ始メテ(其意)覚悟ノ上ニ事ナリ

トス

西字ノ一室ハ国会ニ議セシムヘキ限リニ非ス  
詔勅ヲ以テ宣マレ後之ニ附テ主ル法律ヲ行ハ之  
西字ニ議カレマテテテ論ハナリ 是レ其法律ハ西字  
西文ノ一室シ玉人皆之レニ習熟スヘキ年所ヲ量リ  
宣々史朝ニ達スル前ノ數年ニ及ルハ可キモ一十七レ  
ト信ス

明治三十三年

一 枕上木右刀ノ掲ル白人會  
吾々有志者ノ秀々ト凌西ニ  
此レハ亦ナル

四 春季結

白眼

四海みな兄弟なりや 意見達  
花よ来て先之 願ふる三四杯

○ 公金や 佃を志のぶ 田のあみ

○ 孫鶴田ささかぶる 大ハし

○ 四の五ると言まて 白紙の花の字

○ 四海は静なりと 皇親御命

○ 素お撲 四曲柱の 節なりぬ

二 孫の言ふこと

十一

○ 母子四人に 禮安の寺

○ 春るや 四の瓦子 恩返し

山々の

○ 甲子山り 春研の 謙言 候

○ 四傳問たり 先師掃の 散花の 春

五 廿五

○ 土用午 四季の 五怪し 出たりな



① 暮の松五智佛堂子紅と脱きて

② 船起や五更のての海よりま

③ 孫蔭子五難五難りいろね歌

④ 改巻や五葉の葉歌五葉の巻

⑤ 酔はらん五雨十風の稲

秋 稲の記

蘭家一

① 閑とつまき月と後の納海歌

再る自下民のた態子えと

② 寺内や地ふ遠ふ松森牡丹霞

全七巻  
前回の句打中にあり  
やう有りかへとも  
記憶を  
はるか  
新

以高方より朝鮮京城に川を築道母を全う改革を  
利し目的を以て企圖改むるに急ぐ事国家の志を改  
むるに志望の外ナラズと云ふは其の概を述べ  
て申す也

抑我が對朝鮮の政策タル井戸の燥急ニ備は粗暴ニ敗れ内  
任務の優柔陰奥の狡猾ニ失レ道ニ三回、及び迫り  
奈何にスル無キに至レリ此時に言ハテ策士識者叫呼  
難萬萬擾を置て政府ヲ智育スルナラズ又多國國民  
分ラテテ將ニ濫ラントスルヲ大ニ培ヒ以テ其敗  
醜澆タルを恐ル  
其凌キ早晚恢復せしむるに力ヲ加ヘ一陽未以、時  
ありて是

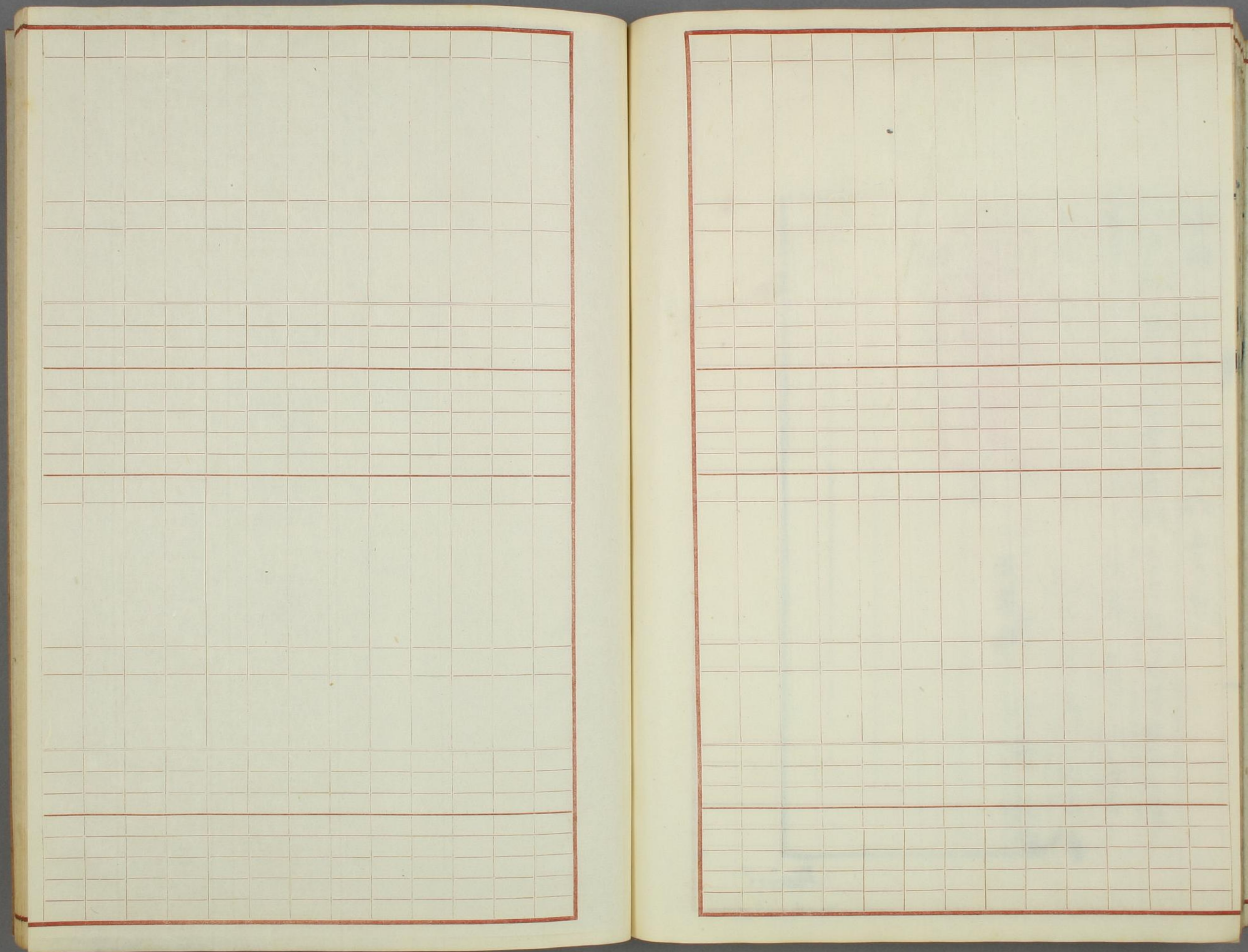
實り得(キ種) 彼地ニ能ハント謀ル者ハ無カリキ 我輩ハ  
嘗テ對朝鮮ノ策略ニ日韓銀行ヲ設ケシ彼ノ為ニ財  
政ヲ匡濟スル同時ニ我ニ財政ノ實權カラシメ有スルヲ謀ル  
ルニ元シトシ 又 經濟ヲ為シツマヤリシニ主后救済ノ事ノ起リ  
ル為ニ全然水沱ニ酌シタラシテ 活款シ 又 近年 未ク自心ニ  
際ニ大ニ輸長ニ因リ 我輩ニ於テ外部大臣 李完用ハ 我輩  
爲山ノ錢道ニ就テ 彼ノ所ナリ之ヲ日本人之許スヘシト 明  
言アリタリトテ 彼等於上 我輩ニ熱心ニ之ヲ我輩ニ譲リタリ  
以テ 歐州此期失フヘカラストテ 歐州起テ 先ツ此輩金錢  
道ノ公案ニ以テ 我輩ノ事ナリ

我ニ朝鮮政府ニ一年以上 經過シテ 今日ニ至ルモ 言ハタ古シ  
テ 之ヲ姑許セス 又 我輩モ 亦 福ニ 只 許可 無キヲ 反テ 在ヘル  
實際ニ 在リ 且 之ハ 我輩ノ 爲メ 許シ 入レ 且 之ハ 一 此 事 以 事ノ  
存シ 且 時 々 我輩 義州 間ノ 錢 乃 亦 彼ノ 仲人ニ 姑許シ 且 我輩ニ  
川 間ノ 一 己 我輩 府ト 姑定マレニ モ 際セ 且 我輩 人ニ 姑許シ 又 我輩  
間ヲ 我輩 人ニ 許スヘキヤノ 風 聞 類リナリト 由テ 何事ヲ 論セ  
ス 先ツ 公 然ノ 出 既 即チ 所謂 之 則 新 權ヲ 取ルノ 途 途 途 途 途 途  
其 目 的 如何 工事ノ 難 易 如何 知ラズ 且 千五百 萬ノ 資  
本ト 姑定シテ 出 既 スルト 爲シタリ 而テ 亦 後 且 我輩 地ノ 景況ヲ  
聞知スルニ 至リ 且 亦 我輩 以テ 能ク 年々 工 事ニ アラス 乃 且 我輩 姑

支、傍も甚々必し難し。是に反て、兵ヲノウる際、有るは、但此兵ハ  
夏一三之止ラス候所、謂前叙ノ事アリテ、秋政府ハ公使ヲ  
以テトシ、交渉ヲシ童子タル間、乞トテ、以テ、和解除、政府ノ  
面目ヲ存スル限リ、之ヲ或ル他ノ國ニ、轉ス、マレハ、カラス、之ヲ許  
カレ、秋海軍力、對馬海陸ヲ支配スル限リ、他ニ、条件、以、東  
南ヲ、呑、噬、スル、候、ウ、サル、ヲ、弄、フ、ト、モ、乞、合、告、致、シ、ム、或、者、ハ  
三、指、万、乃、至、四、五、指、万、部、ノ、財、賂、ヲ、用、ル、中、ハ、持、許、ヲ、得、ル、ト、其、中  
ノ、物、ヲ、探、知、ス、ル、モ、容、易、ナ、リ、ト、説、キ、其、軍、ヲ、試、シ、シ、ト、言、ヒ、シ、モ、予、ハ  
幸、ニ、其、金、ヲ、并、シ、得、キ、道、マ、リ、ト、ス、ル、モ、決、シ、テ、可、ト、ス、一、カ、ラ、ス、ト、シ、テ  
今日、ハ、乃、シ、其、此、鐵、道、何、ノ、見、代、國、力、ノ、如、成、ニ、成、リ、テ、成、ニ、シ、レ、ト、存、ハ、

前記、如キ、四、月、ナ、ル、モ、只、至、親、為、ノ、事、至、鐵、道、ヲ、漫、然、主、張、シ  
居、ル、ハ、初、室、福、家、ノ、域、ニ、屬、シ、故、為、中、行、者、ノ、志、ニ、難、ク、何、ト、口、突  
絶、ノ、端、ヲ、得、テ、其、成、蹟、ヲ、舉、テ、謝、次、ニ、時、核、ニ、合、シ、テ、志、望、ヲ、達、セ、シ  
ト、秋、軍、同、志、者、且、各、志、合、シ、テ、乞、テ、サ、リ、シ、事、ナ、ル、カ、ナ、米、人  
モ、ル、ス、ト、其、在、鐵、道、費、打、許、林、ハ、其、時、許、ヲ、得、タ、ル、事、ニ、誠、道、ヲ、  
成、ユ、ノ、上、ニ、テ、秋、軍、ノ、意、度、ス、ヘ、シ、ト、秋、軍、ノ、後、承、ニ、存、セ、リ、  
是、レ、今、般、ニ、羨、ミ、井、他、ノ、者、口、家、ヲ、動、シ、事、ニ、鐵、道、組、合、ヲ、  
起、シ、秋、軍、ノ、力、者、モ、之、ト、但、合、自、ト、ス、ル、以、テ、之、レ、就、キ、  
大、隈、外、留、大、臣、ニ、其、機、略、上、直、向、ノ、關係、ヲ、以、テ、又、信、守、余、一  
后、同、志、者、ノ、一、自、タ、ル、以、テ、幹、務、ノ、分、ヲ、取、テ、レ、タ、ル、ハ、官、





以下全て  
白紙

